日本医史学雑誌　第68巻第1号（2022）　52–59

# 医史学と私

川嶌　眞人

川嶌整形外科病院理事長

私が医学史を志すきっかけとなったのは，たまたま私の生家が福澤諭吉旧居のすぐ近くで，物心ついた頃から近所の子供会で福澤旧居を掃除しながら育ったという背景がある．しかし何年か過ぎた頃には掃除人は姉の眞美と私の二人だけになっていた．小学校5～6年生の時に松山均という担任の先生に巡り合う事となった．ある時，君は福澤先生の家を掃除しているようだが，福澤先生はどのような人だったか知っているのか？ 先ずは福澤先生のことを勉強してみてはどうかと勧められ『福翁自伝』を読むこととなった．それから私の前に福澤諭吉の世界が一気に広がってきたのが，そのきっかけである．諭吉は，父（中津藩の下級武士）の赴任先である大坂・中津藩蔵屋敷で生まれ，2歳の時に父を亡くし，父の故郷，中津に戻り母・お順の内職で育った．兄の勧めで蘭書を読み，兄の伴をして長崎に遊学（実際は砲術家の山本惣次郎の食客），この時，和蘭通詞・楢林英左衛門や医師・楢林健吉らに蘭学を学んだ．この時学んだ蘭学が，その後の諭吉の成長の大きな糧となる．その後，長崎から江戸に向かう途中で大坂の兄・三之助に説得され，緒方洪庵の適塾に下男として入塾し最下位の生活をしながらも，学問に対する情熱は誰よりも強かった．ところが不幸なことに父の跡を継ぎ大坂蔵屋敷に勤めていた兄・三之助が死去し，諭吉は福澤家を継ぐため中津に戻り，借財の返済や生活費を工面するため，父が残した貴重な書籍を臼杵藩に売却したといわれ，その書籍類は臼杵市教育委員会の蔵書として現在も残されている．

その後，諭吉は砲術修行の名目で大坂に戻り，適塾に正式入塾したが，緒方洪庵の『ペル築城書』の翻訳を手伝うということで食客生となった．諭吉は瞬く間に頭角を現し，1857年には22歳で第10代塾頭となった．その後の諭吉は，1858年藩命で江戸に召集され，蘭学私塾を開設（築地鉄砲州），1859年横浜で英語能力の必要性を痛感し，独学で切り開き，翌1860年には咸臨丸で軍艦奉行の従者として渡米し，1862年には文久派遣欧使節団の通訳として欧州を視察，1867年には幕府の軍艦受け取り委員会随員として再度渡米，そして1868年には「蘭学塾」を「慶応義塾」と改称し，教育活動に専念する事となった（図1）．

この様に諭吉の広い視野を持った生き方は，私にとって大きな影響を与え，私自身も広い世界を知るべきであると考える様になった．たまたま1972年から九州労災病院に赴任することとなり，私の師匠である天児民和先生（九州労災病院長・

**図1**　福澤諭吉侍姿（福澤諭吉資料館）

九州大学名誉教授）から「潜水病と骨壊死」の大きなテーマをもらい，それからは日米政府間パネルの研究員として，ほぼ毎年のように米国に出張するようになり，そしてウィスコンシン州立大学のチャールス・レーナー博士とも共同研究するという大きな機会に恵まれた．そのような中で天児先生から研究一途（昼間は手術，夜は深夜まで動物実験）だけでは精神的なバランスが保てなくなる恐れがある．中津藩は前野良沢から福澤諭吉に至るまで蘭学発祥の地であり，特に整形外科では東大の初代整形外科教授で「日本整形外科の父」と呼ばれる田代義徳先生の養父・田代基徳先生（適塾出身で緒方洪庵を最後まで支え軍医学校長を務めた）は中津出身であり，これらの医学史を研究してみてはどうかとご指導戴いた．丁度その頃，土曜日は中津の村上記念病院で当直勤務をいていた状況もあり，日曜日には村上家に残されていた約三千点の史料を郷土史家の今永正樹先生と調査することになった．当時の村上記念病院の理事長であった菊池次郎氏や樋田延博事務長の支援もあり，膨大な史料を整理して村上病院立史料館を立ち上げようということになった．

## 村上医家

村上医家の史料の中で最も注目すべき史料は，村上医家7代目村上玄水が自ら執刀した人体解剖の「解臓記」である．私が調査したところ，解臓記の付図として解剖図の下書きが出てきたが，中津藩の絵師・片山東蘺と佐久間玉江が描いた本来の絵は見つからなかった．何としても絵師が記録した本物の絵を探し出そうと手を尽くしたところ，京都新聞社の森氏から「都立図書館の貴重本」として保存されているという情報を戴いた．丁度その頃，大分県立図書館に勤務されていた櫟木（いちぎ）晋一郎氏（箭山神社宮司・大分県神社庁顧問）の尽力により，解剖図を写真版として入手することができた．また，これまで中津で確認されていなかったカラー色の解剖図や解剖に至った経緯，見学した57名の医師の記録なども判明した．その中からは，当時の時代背景も読み取れ，漢方医学が主流で仏教や儒教では解剖を忌み嫌っていた時代背景が読み取れる．玄水は，この解剖を『解剖図説』として出版するつもりでいたらしく，豊後の3賢人の一人と称される帆足万里が序文を残している．この村上玄水の解剖は，詳細な記録が残る解剖としては九州で最も早い時期のものである．玄水は津山藩の宇田川玄真の『医範提綱』を参考にしたことから，「これは余りにも優れたものであったので図も数枚書き残したのみである」と玄真宛てに手紙を送っている．このことが発火点となり，2021年11月18日，中津市・津山市・津和野町は「三津同盟」を締結し，蘭学・洋学の分野で学術，観光交流することになった．

国東半島に住む杵築藩の医師・三浦梅園は，中津の藤田敬所に師事しこの地に3度訪れている．その時，中津藩医の根来東麟に会い，更に3年後，東麟の父・東叔が作成した『人身連骨眞形図』を写し取った．ところが，梅園は動物解剖を数多くしたが，人体解剖までには至らなかった．しかし，梅園は後に『造物余譚』としてまとめ後世に伝えた．梅園による発見がなければ東叔の功績は闇に消えたかも知れないと言われている．私は，『連骨眞形図』の本物がどこかに存在するのではないかと探し回って，遂に入手することに成功した．現在，村上医家史料館に展示してある（図2）．この日本最初の人骨図は，京都の眼科医根来家の2代目・東叔（1698～1755）が火あぶりの刑に処せられた2人の遺骨を拾い集め組み立て描いたものであり，根来家3代東麟は中津藩主奥平昌鹿の御医師となり，先代から引き継いだものであった．この詳細については九州大学名誉教授・ヴォルフガング・ミヒェル先生の論文を読んで戴きたい．中津藩には解剖にまつわる史料が多いのは，歴代の藩主が藩をあげて蘭学に取り組んできた背景がある．なお，日本最初の人体解剖は1754年，京都の山脇東洋が行い『蔵誌』として出版したのが最初である．一方で，中津藩では，藩主奥平昌鹿の母親が骨折した際，たまたま江戸に来ていた長崎の蘭方医・吉雄耕牛が見事に治したことから蘭学に興味を抱き，前野良沢を1769年長崎に留学させた．その良沢が持ち帰った『ターヘル・アナトミア』が杉田玄白らとともに『解体新書』として翻

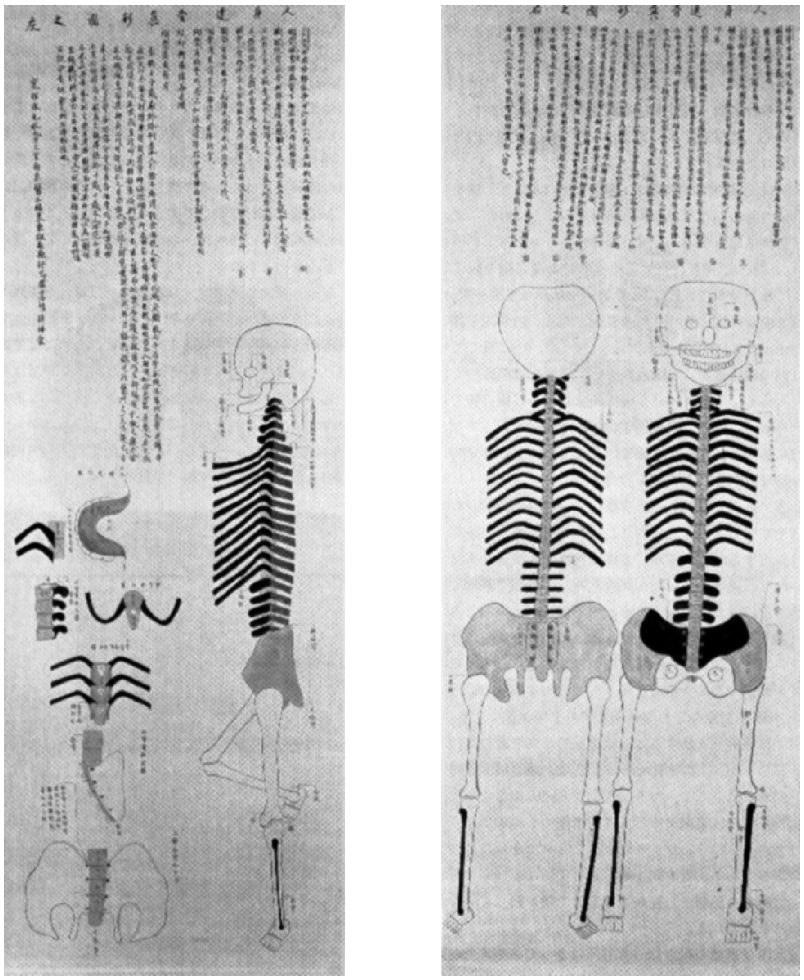

**図2**　根来の連骨真形図原図（村上医家史料館）

訳出版されたことは余りにも有名である．

この『解体新書』の初版本は，中津の大江医家に存在し，前野良沢の存在が大きく影響したことは間違いない．

日本医史学会元理事長の小川鼎三先生は，「真の意味で蘭学の幕開けであり，日本の科学史はここから始まった」と述べておられる．

前野良沢の書『長寿』は，村上医家で発見されており，その内容は，80歳に届こうとする良沢が，蘭書はまだ届いていないかと老いてなお意欲的に取り組んでいた様子が見て取れる（図3）．『解体新書』に前野良沢の名前がない事は広く知られているけれど，明治2年及び明治23年，福澤諭吉によって杉田玄白が晩年著した『蘭学事始』が復刻され，それによると杉田玄白が自ら前野良沢を師として良沢に学びながら翻訳したと，正直に書いている．辞書もなく3年半の歳月をかけ翻訳に成功したにもかかわらず，良沢の名前がないのは医学史上の謎とされている．この事を福澤諭吉は『蘭学事始』の復刻版で，「涙が流れて止まらない」と書いている（図4）．

藩主奥平昌鹿の後を引き継いだ奥平昌高は，自らシーボルトに蘭学を学び1810年には，神谷源内を編集主幹として『蘭語訳撰』更に1822年には御典医・大江春塘を編集主幹として『中津バスタード辞書』を刊行し，自らも見事な蘭文の序文を掲載している．大分大学鳥井裕美子名誉教授によると，この二つの辞書を活用してライデン大学の

**図3**　前野良沢　長寿書（村上医家史料館）

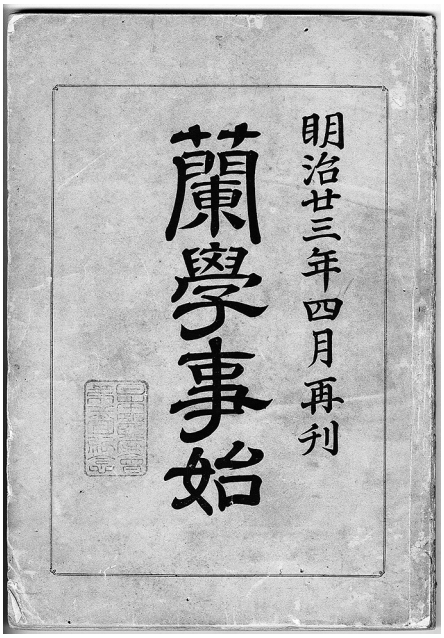


**図4**　蘭学事始（明治23年）

J・Jホフマン教授は，長崎の出島に赴くオランダ人に日本語を教えていたという．私自身もライデン大学でボイケルス教授に招請された講演の折に，その二つの辞書が大学図書館に存在することを改めて確認した．この奥平昌高が創設した藩校・進脩館の初代教授を勤めた倉成龍渚（1748～1813）のもとに坪井信道が訪れ，中津藩が解剖学を学んでいることに驚き，自らも蘭学者に成ることを決意して長崎に留学し，幕末三大蘭学者と成り，その塾頭に緒方洪庵先生が成ったことは余りにも有名である．

村上医家初代・宗伯は，京都の名医・古林見宜の門下生と成り1640年に医師開業免許ともいえる免許認定奥書をもらい中津で開業した．宗伯は「医も亦自然に従う」という書を残している．

さて，村上医家の中でも，九州で最初の人体解剖を全国から集まった多くの医師達を前にして行った村上医家7代目玄水の画像は見つからず諦めかけていたところ，2019年1月14日の大分合同新聞によると，捜していた肖像画が村上医家の中から発見された．

玄水は，中津藩主奥平昌高が設立した藩校・進脩館で儒学者の倉成龍渚と野本雪巌に国学・漢学・洋学・武術など幅広い教育を受けた後，久留米の儒官に兵法と軍学を学び帰郷中に長崎遊学帰路の蘭方医・中井厚沢（広島）との出会いで大きな影響を受け蘭方医になる決意をし，5年後に中津藩の御典医となった．これら玄水の人生を写す様な画像が発見された．「弓を背景に蘭書を読む」玄水そのものの姿であつた．これを発見したのは，同史料館の館務員であるが，中津市教育委員会学芸員や専門家等が玄水の肖像画であると確定した（図5）．この村上家に残されていた膨大な史料は1982年，村上医家史料館を立ち上げ15年が経過したものの，病院で維持することが困難になり理事会で廃止が決議され，私も途方に暮れていた．当時の中津市長・鈴木一郎氏は私を教育委員として，この史料を市の学芸員と1年余調査することを要請し，その史料の価値が認められ1996年，市立「村上医家史料館」として再出発した．以来，膨大な史料の調査を継続している中で，今回の発見は大きな成果であった．同時に，この3千点に及ぶ史料は私一人の手に負えるものではなく，W・ミヒェル九州大学名誉教授らの献身的な努力により史料が解読され史料集として公開されている．

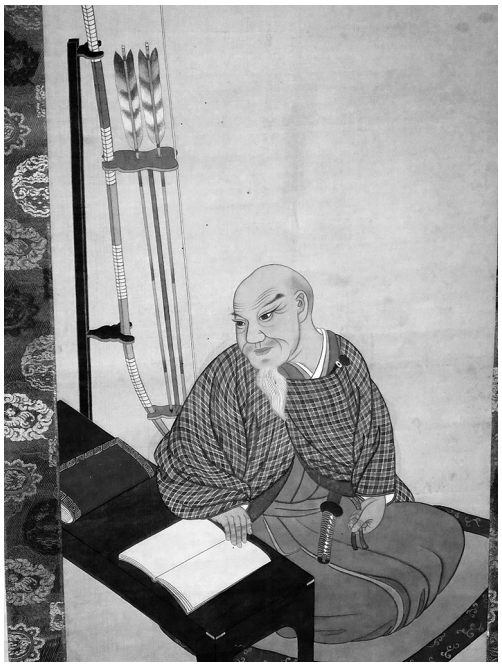

**図5**　村上玄水画像（村上医家史料館）

さて，村上医家の史料を中津市に移管するため8ヶ月間にわたって史料を整理していたところ，4本の一節截（ひとよぎり）という古代尺八が見つかった（図6）．更に杉田玄白が書き残した『蘭学事始』に書かれている前野良沢が再従兄弟の簗次正に直接渡したといわれる1本も発見された．当時，村上医家史料館の館務員をされていた本徳照光氏が中心となって復元に挑み，現在，当院において尺八の大師範・伊藤正敏先生の指導のもとに江戸時代の「中津一節截の会」として13年にわたって演奏活動が続けられている．この一節截をこよなく愛した人として，後醍醐天皇（1288～1339）や懐良（かねよし）親王（征西将軍）が知られている．この南北朝時代の南朝方の逸話集『吉野拾遺』（芳野拾遺物語）にそのことが書かれている．

懐良親王を支えて九州入りした従者の一人，藤原孝範が豊前地方を統括し，北朝方大友氏の目付役として中津の丸山城（山国川河口の堆積地で，後の中津城付近といわれている．）に居を定めたといわれている．南北合一後もこの地に留まり，土着して大江姓を名乗った．時代は下り戦国時代

**図6**　一節截（村上医家史料館）

となり黒田如水の豊前封入に際し，抵抗勢力となったが降参し帰農した．その後，江戸時代に入り本家13代の時代に医家となり，そして更に2家の医家が御典医を勤め幕末には3系統の大江医家が存在した．

## 大江医家

鷹匠町には分家した大江家が7代にわたり医家として様々な業績を残してきた．初代は大江五郎衛門（1685～1732）で，2代玄仙（1710～1792）から7代億司（1864～1919）まで藩医を勤め，更に8代忠綱（1910～2001）まで医家として続いた大江医家の中から約700点近い史料が発見され，多くの貴重な史料が含まれていることから，私が行政に移管すべく交渉していたものの中々進展しないで苦慮していた折，大江医家6代雲澤が華岡流の薬草学を学び，豊後町で薬草風呂をしていた史料を入手した．私達は岐阜のエーザイ株式会社の「内藤記念くすり博物館」から薬草の苗を戴き，更に華岡青洲の「春林軒」を訪れた折に，地元名手の元駅長・前川雄造氏から戴いた「マンダラゲの苗」を大江医家の薬草園に植え，その薬草園を「マンダラゲの会」として管理する事から始まった．私達は薬草を育て薬草風呂に入り，一節截を奏で2年後には行政への移管と改修工事も完了し「中津市立大江医家史料館」となった．さて，ここで鷹匠町系大江医家代々について触れてみると，2代目（医家として初代とも）玄仙は，奥平昌鹿から9人扶持をもらい御典医を勤めていた．1754年には長崎にて栗崎流を学び金瘡外科免許状が残されている．我が川嶌家先祖の墓からも，同時期，

川嶌道庵という医師が同じ栗崎流を学んでいたことが墓標に刻まれている．此のことから察すれば，中津藩から数名の医師が栗崎流を学びに行ったのではないかと思われる．3代目の大江文明（1757～1812）も同様に中津藩医を勤め百石のお墨付きをもらっている．この人が最初に「医不仁之術　務欲為仁」の医訓を残した人物である（図7）．これは今日でいう医のリスク・マネージメントで医術というものは「専門技術や知識の詰め込みだけでなく，人間性の教育も重視しなければならない」ということの提唱者であった．これは大江医家代々の医訓として引き継がれている．

4代目，大江元泉（1768～1825）は藩主奥平昌高から10人扶持をもらい，長崎の吉原元棟から杏蔭斎正骨術名之目　免許状をもらっている．これは現存する最古の整骨免許状である（日本医史学会理事長を勤めた蒲原宏先生が調査確認済み）．

6代目，大江雲澤は明治4年（1871）に創設された中津医学校の初代校長を勤めた．雲澤は，華岡塾（春林軒）の大坂分塾（合水堂）で学んだ．かつて，大阪で日本医史学会が開催された折に，この合水堂の跡地に華岡家と日本医史学会が設立した「合水堂記念碑」の竣工式に出席した時は感無量であった．なお，合水堂は華岡良平の死後，華岡青洲の娘婿・華岡準平（1797～1865）が継承し，良平の遺児・康平を守り立てた．大江医家には，華岡準平から雲澤の父・玄明宛の手紙等3通が残されている．大江医家に残るものとして，襖絵に華岡青洲の図があり，そこに書かれていた漢詩が解読不明であったため，私は和歌山県加賀町の青洲の塾跡を訪ねた．そこには，青洲の墓地に隣接して華岡青洲公園があり，そこに青洲自作の漢詩が刻まれていた．その意味するところは「自分は，何の富貴栄達も望まない．自然に恵まれた田舎に住んでいるが，ひたすら思う事は，瀕死の病人を回生させる医術の奥義を極めたい，ということのみである．金を儲けて絹の着物を着たり，立派な馬に乗りたいとは思わない．日々患者の痛みや苦しみに心を痛め，どのようにして患者を救えばよいか，何とかならないものか，そればかりを思う毎日である」ということが書かれている．

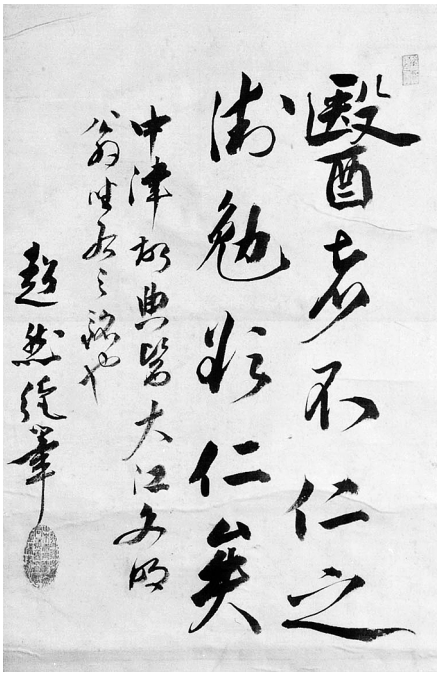

**図7**　大江文明　不仁書（大江医家史料館）

この時，私が最寄駅の名手に着いて，駅長の前川雄造氏に道を訪ねたことから，何しに来られたかということになり，実は華岡塾に学んだ郷土の医家に関連した調査に来たといったことから，名手駅に植えてあった「マンダラゲの苗」を戴き，中津に持ち帰り自宅の庭で育て，その種子を，友人の花栽培業をしていた故豊田昭一君に依頼し，立派な苗に育ててもらった．この苗を大江医家史料館，村上医家史料館，中津医師会立ファビオラ看護学校に植え，いずれも立派に根付いている．なお，前川氏は後年，当地を来訪され，中津で根付いたマンダラゲに感激されていた．その後も今日まで和歌山の美味しいミカンが我が家に毎年届き，医学史の一端を通じた交流は今なお続いている．

6代目大江雲澤に話を戻すと，雲澤は中津医学校の初代校長となり次の医訓（教訓）を基本方針とした．

医則第1，医は仁ならざるの術，務めて仁をなさんと欲す

第2則，実中に虚を察し，虚中に実を察す，医は

なお兵（いくさ）の如し

第3則，病に対して，利を図り，名を好み，インチキしてはならない．己の蓄財のためではなく，天地大自然の命の営みを助けるものである．

第4則，冦（あだ）には矛（ほこ）をとり武を奮うを知るも，これを撫安するを知らず，火には水をもってこれにむかうを知るも，火をもって火を制することを知らない．根本を治めて末節を処理し，病気の原因を知って，その症状に対処する．魚を取る網を使わないで，魚を取る方法を知っている人物でなければ，ともにこの仁術，医術を語ることはできない．

この大江雲沢の中津医学校における教育の基本方針は，「医は不仁の術」（図8）であり，今日に於いても新鮮である．私は，中津の医学の歴史『医は不仁の術　務めて仁をなさんと欲す』を出版したところ，日本臨床薬理学会・日本胸部外科学会・日本インターベンション学会や九州大学・東京医科歯科大学の卒業式の学長訓話にまで引用され，医のリスク・マネージメントは中津に始まるとまで述べて全国に知らしめて戴いたことは極めて感謝している．

## 整形外科の源流

村上医家史料館を立ち上げていた頃に，田代家に関する史料が発見されて寄贈され，日本の整形外科の発祥に，中津が大きく関係していることが判明した．田代基徳先生は中津の儒医・松川北渚の実子として出生，幼時に父を失い，従兄弟の田代春耕の家を継ぎ田代姓となった．松川北渚の墓は私の調査で，中津市金谷の自性寺にあることが判明し，天児先生とともに参拝したところ，先生が長い間黙読されていたことは忘れられない．田代先生は筑前，肥後，京都，大坂で漢方医学を学び，1862年大坂の適塾に入り緒方洪庵に蘭学を学んだ．明治元年（1868）の鳥羽伏見の戦いでは軍医として負傷者の治療に忙殺されながら，クロス・バーナードとリンドバードが書いた外科書からクロロホルム麻酔と四肢切断の項を訳して『切断要法』を出版した．このことから，田代基徳は

**図8**　医は不仁の術　大江雲沢書（大江医家史料館）

外科医でありながら整形外科に興味を持ち『外科手術』という本を出版し，その内容の大半は整形外科に関するものであった．

田代基徳の養子として迎えられた義徳は栃木県足利市の田部井家の3男として生まれ東京大学医学部を卒業後，外科学教室助手となって，1900年，文部省留学生となりドイツ・オーストリアに留学し整形外科を学んで帰り，1906年5月9日，日本で最初の整形外科の教室・東京大学整形外科教授となった．この「整形外科」と命名したのも田代義徳である．留学から帰り，英文のOrtho Paedicsの日本語訳に苦慮し「整」は，「これを束ね，これをたたき，これを正しうす」という意味で，形を整えれば機能も正しくなるということで「整形外科」とした．1926年4月3日には田代義徳会長のもとに日本最初の「日本整形外科学会」が開催された．世界で9番目であった．田代義徳は，「仁の心で術を始める」と書を残している．私の師匠は，第26回会長を務めた九州大学名誉教授の天児民和先生である．天児先生は整形外科のみならず，手の外科学会，リハビリテーション学会，並びにパラプレジア学会等の会長をつとめ，幅広い分野で貢献し，国際整形災害外科学会京都大会の会長をつとめた．私が大分大学で整形外科の歴史を教える機会を作ってくれたのも天児先生の教えがあったからである．

2021年12月4日「玄朴と長英」という劇が中津文化会館で上演されることとなり，私は実行委員会の名誉会長をつとめることになった．主人公の一人高野長英がシーボルト事件で長崎を追われ，

1829年日田を経由して中津の村上医家の土蔵に40日間潜伏し，村上医家7代・村上玄水が自から膳を運んだ蔵には，長英が残したと伝えられる学問訓があり，蘭語で「最後までやりぬかなければ最初からしないほうが良い」と書かれている．私は更に，この学問訓を調べるために岩手県奥州市水沢の高野長英史料館を訪れたところ「水滴は力によらずして落ちることによって石をも穿つ」という蘭語の学問訓が展示されていた．実は，この学問訓は，長英が脱獄して群馬県の中之条で医師を開業していた門弟の福田宗禎の奥方が営んでいた沢渡温泉の福田旅館に潜伏中に残したものと判明した．当時，私の職場であった九州労災病院に群馬大学から研修に来られていた森田秀穂医師が福田宗禎家現当主・新井三郎氏と知り合いであったことから，現物の写真を持ち帰ってもらい，村上医家の蔵の中に展示してある（群馬の現物は板に刻まれている）．なお，当院には日田市の石造芸術家・渡辺氏によって創られたモニュメントが設置されている．

私は医学史を通して色々な人々と知り合い，又種々の遺訓・教訓・哲学を学び，そして村上医家初代・宗伯の残した「医亦従自然也」という哲学のもとに，我々は医療を続けなければいけないということを日夜職員に教育してきた日々であった．

## 参考文献

『医は不仁の術　務めて仁をなさんと欲す』
川嶌眞人　西日本臨床医学研究所　1996年
『蘭学の泉ここに湧く』　川嶌眞人　西日本臨床医学研究所　平成4年
『九州の蘭学』　川嶌眞人　W・ミヒェル　鳥井裕美子共編　思文閣出版　2009年
『近代医学を築いた開拓者達』　川嶌眞人　西日本臨床医学研究所　2010年
『水滴は岩をも穿つ』　川嶌眞人　西日本臨床医学研究所　2006年
『続水滴は岩をも穿つ』　川嶌眞人　西日本臨床医学研究所　2021年